

隠された内面性から、外的世界との衝突へ

キルケゴールの「内面性」コンセプトを再検討する試み

吉田敬介(学習院大学)

本発表は、キルケゴールの「内面性」コンセプトを再検討する試みをなす。そのために発表者は、キルケゴールを「内面性の哲学」と見なしてきたドイツ語圏の研究伝統から出発しつつ、キルケゴール自身のテキストに即して彼の「内面性」概念の展開を辿っていく。そしてそのことによって、キルケゴールにおける「内面性」コンセプトが単なる内的感情への閉じこもりに尽きるものではなく、むしろ外的世界とのある種の関わり方を認識し表現する実践的ポテンシャルを持つものであることを明らかにする。

キルケゴールは、その著作活動の最初期から、内面性の問題に取り組んでいる。『あれかこれか』(Enten – Eller 1843)の「前書き」からして、「親愛なる読者よ、これまで君にもやはり、外的なものとは内的なものであり、内的なものは外的なものである、というあの有名な哲学的命題の正しさを少しだけ疑ってみる気になったことがあるかもしれない」という一文で始まっている。ヘーゲルの『論理学』を暗示するこの文章でもってキルケゴールは、人間主体の内面が歴史や社会といった外面と一致するものであるという見解に異を唱える。そしてその上で彼は、外的世界ではなく個人の内面性にキリスト教信仰の真理を見る思想を展開していくのである。

内面性を強調するこの思想は、とりわけ『哲学的断片への結びとしての非学問的後書』(Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler 1846)において極まる。というもこの書においてキルケゴールは、世界や歴史を包括的に考察する体系的思弁よりも、人間の具体的現実としての実存を重視し、実存する個人の情熱にこそ真理がかかっているという議論を展開するからである。かくして彼は、「主体性、内面性は真理である」というテーゼとともに、外的世界から距離をとり内的な情熱的信仰のうちに集中することを求める。まさしくここで、プロテスタント信仰を尖鋭化させた極端な主観主義とも言うべき「隠された内面性」コンセプトが——外面に背を向けて自らの内に閉じこもるような内面性コンセプトが——提出されているのである。

20世紀に入り、ドイツ語圏を中心にキルケゴールが再発見された際、キルケゴール思想のまさしくこの主観主義的側面が注目されることになった。Th.ヘッカーのキルケゴール論『セーレン・キルケゴールと内面性の哲学』(Søren Kierkegaard und die Philosophie der Innerlichkeit 1913)のタイトルが端的に示すように、キルケゴールは、主体の内的世界に真理を見る内面性の哲学者として評価されたのだ。このような解釈のされ方は、「不安」や「絶望」といったキルケゴール思想上の鍵概念とも結びつき、彼の思想を哲学的に解釈する上で一つの定式となったのである。

このような解釈の伝統から出発しつつ、そこに見られる内面性への引き籠もりという傾向を批判したのが、Th.W.アドルノである。アドルノは最初期の著作『キルケゴール 美的なもの構築』(Kierkegaard: Konstruktion des Ästhetischen 1933)において、個人の内的思考と歴史の外的現実とが和解し難い非同一の関係にあることをキルケゴールが自覚している点を評価しつつも、このような自覚から出発したその主体性概念が「客体なき内面性」という閉じられたあり方に陥ってしまっている点を批判した。ただただ自らの主体的内面性にだけ沈静する思想は、客観的現実と自らの関係を適切に築くことも、またそのために歴史や社会に批

判的洞察を向けることも、できなくなってしまうというのである。

ヘッカーによる評価やアドルノによる批判は、キルケゴール自身が閉鎖的な「隠された内面性」コンセプトを提示しているという点に鑑みれば、一定の正当性をもつ。とはいえ、近年の幾つかの研究が示すように(例えば E. Harbsmeier, „Der Begriff der Innerlichkeit bei Søren Kierkegaard“ 1999 や M. Engmann, *Innerlichkeit: Struktur- und praxistheoretische Perspektiven auf Kierkegaards Existenzdenken* 2017)、キルケゴールが単に内面性に引き籠るだけの思想を展開したわけではなく、内面性を何かしらの仕方でも外的世界に表現することを求めているという点は、見逃されることができない。このことに対応するようにキルケゴールは、実際に自らの著作活動をもって外的現実に関わり続け、その晩年には当時のデンマーク国教会との論争という仕方でも社会と対峙することも辞さなかったのだ。このように見ると、彼の思想が「内面性の哲学」に汲み尽されるものではないことは明らかである。しかしそうだとすると、なぜキルケゴールは、一方で「隠された内面性」コンセプトを提示しながら、他方で外的世界との実践的関わりを志向することができるのだろうか。

この点を考察する上で重要なのが、『死に至る病』(Sygdommen til Døden 1849)や『キリスト教の修練』(Indøvelse i Christendom 1850)といった後の著作において、キルケゴール自身が内的信仰の隠されたあり方に満足することを問題視し、外的世界に開かれかつそこで表現されるような内面性を求めているという点である。注意する必要があるのは、その際にキルケゴールが単に自らのかつての思想を撤回したわけではないという点である。むしろ彼は、引き籠るのかのように隠された内面性に沈静することを、罪意識とともに真なる主体に向かうための一契機としてなおも重要視しているのである。

このような見方によれば、主体的個人は、罪意識の生成とともに自覚される外的世界と自らの決定的差異のために、まずもって自らの内的反省に集中せざるをえない。そしてこの集中的な内的反省によってはじめて主体は、自らがやはり内的世界だけで説明のつく存在ではないこと、むしろ客観的現実によって条件付けられた存在——他者の力によって指定された存在——にはほかならないことを、認識するようになる。このように主体は、罪意識から出発する内面の集中的反省というプロセスを経てこそ、自らとは異なるものとしての外的世界に開かれることができる。この意味でキルケゴールは、内的感情への引き籠りなどではなく、内的反省を通じた外的世界との関係の転換をこそ求めているのである。

こうして転換したキルケゴール的主体は、内面性を抑圧する外的社会との衝突に至る。すなわちキルケゴールは、啓蒙や世俗化という歴史プロセスのただなかで個人の内面をも画一化し蹂躪してしまう社会の傾向を看破し、それに対抗するようにして個人の内面に基づく社会批判を展開するのである。この批判は、キルケゴール自身に言わせれば、あくまでもキリスト教信仰の実現という唯一の目標に奉仕するためだけになされるものであるだろう。とはいえここから、信仰論の枠に収まらない思想上のポテンシャルを——内的思考と外的現実との関係についての独自の歴史的自己認識・自己表現のための実践的ポテンシャルを——見いだすこともできるのである。それどころか、キルケゴールの内面性コンセプトから、近代化がさらに推し進められ啓蒙や世俗化のあり方が再検討されつつある21世紀のための一つの思考モデルを読み取ることもできるかもしれない。